

# デュガルド・スチュアートにおける「国富」とは何かをめぐって ——『政治経済学講義』第2編第1章「ノートからの転載」を中心に——

荒井智行

## 第1節 はじめに

本稿の目的は、デュガルド・スチュアート (Dugald Stewart, 1753-1828) の『政治経済学講義』(以下、『講義』と略記) 第2編「国富について」第1章「生産的労働と不生産的労働について」の冒頭に収められた「ノートからの転載」を取り上げて、生産的労働に関するスチュアートの主張を明らかにすることである。

周知のように、アダム・スミスは、『国富論』において、国民の富の水準は、国民一人あたりの消費財の量によって示されるとし、文明社会の富裕化の根本原因を分業に求めた。分業および資本蓄積の拡大のためには、労働生産力の向上・発展のあり方が問われなければならない。そこでスミスは、労働生産性の上昇のためには、不生産的労働者(政府や軍隊など)よりも、生産的労働者(農業・製造業労働者たち)の割合を高めることを重んじた。

それでは、生産的労働に比重を置いて国富の増大について議論したスミスの主張は、その後、どのように受け止められ把握されることになったのであろうか。その一端を理解するために、本稿では、1790年のアダム・スミスの死後、スミスと同じスコットランドのエディンバラ出身のデュガルド・スチュアートに光を当てて検討することにした。スチュアートは、1800年から10年間、エディンバラ大学で政治経済学講義を行った人物で知られ、スミス以後の経済学の展開を知るうえで不可欠な存在である。彼の講義は、その講義を受講したエディンバラ・レビューを始め、多くの人物たちに影響を与えた(荒井 2016, 21-24)。

デュガルド・スチュアートは、その講義の中で生産的労働のテーマについて注意深く扱った。『講義』の第2編「国富について」の第1章「生産的労働と不生産的労働について」は、(1)「特に、エコノミストの体系について」、(2)「労働をより効果的にする諸事情について」、1)「分業について」、2)「労働の代替物としての機械の使用について」によって構成されている。この目次の通り、第2編、第1章「生産的労働と不生産的労働について」の考察範囲は、分業や機械の主題にまで及んでいる。『講義』の中でスチュアートが考察した生産的労働と不生産的労働は、実に50頁以上に及ぶ

内容となっており、第2編の中でも特にページ数の分量が多い項目の1つである。

本章において、これほど多くのページが割かれている第1章の内容すべてを一度に考察することは、未熟な筆者の力量を超えるものである。また、以下で示す理由から、生産的労働についてのスチュアートの正確な主張を明らかにするためには、一度の論考で考察範囲をあまり広げすぎない方がよいように思われた。この第1章の内容を、短く区切りながらテキストの内容を丁寧に考察した方が有効的である理由が少なくとも2つあげられる。1つ目は、生産的労働に関するスチュアートの研究について、国内外の研究においてこれまで十分に考察されてこなかったため、『講義』第2編第1章の冒頭部分の「ノートからの転載」の基本的特徴をまずは詳しく示す必要があるからである。また、その点と関連して、本章で扱う「ノートからの転載」についても、それ自体に焦点を当てた研究はほとんどないと思われる。スチュアートが重農主義的性格の持ち主である点については、Rashid (1987) や太田 (1988) によって言及されたが、それがなぜ、どのような理由であるのかについては必ずしも十分に論じられているわけではない。またその点について、それ以降も内外の研究において、その具体的考察として詳細に検討されてこなかったように思われる<sup>1)</sup>。

2つ目は、この主題の考察範囲を広げることは、スチュアートの真の主張を掴みにくくさせてしまうからである。この主題に限らず、『講義』は、その名の通りスチュアートの講義であり、必ずしも論理的に秩序立てて論じられているわけではない。例えば、『講義』の中では、自らの主張をまとめるべきところで何も述べられることなく次の主題に話が進められてしまう場合がある。本稿の中でも指摘するように、上述した「ノートからの転載」の中でさえ、こうしたことが見られる箇所がある。それゆえ、この「ノートからの転載」の中でさえ、スチュアートの正確な主張を読み解くためには、テキスト分析を通じて彼の主張について順を追って細かく見ていく必要があるといえる。

それでは次に、『講義』第2編第1章の冒頭で論じられる「ノートからの転載」とは何かについて、ここで簡単に説明しておきたい。『講義』の目次には、この「ノートからの転載」という言葉は明記されていない。『講義』には、他の箇所においても、スチュアートの草稿がいくつか収められているが、目次には、草稿の名称まで記されていない。『講義』の編集者のウィリアム・ハミルトンは、「序論」の中で、スチュアート『講義』の特徴、すなわち、スチュアートの「講義ノート」や「学生ノート」を利用して『講義』の編集のされ方について説明した。そして『講義』の編集上、注

---

1) それは2000年代以降についても同様であり、例えばMilgate and Stimsonなどに見られるデュガルド・スチュアート研究についても同じことがいえる。スチュアート経済学のこれまでの研究については荒井 (2016) の中で詳しく論じたため、本稿ではその点についてここで繰り返して述べることは控えたい。

意すべき点については、各項目の中で脚注をつけて説明すると明示している。『講義』第2編第1章の(1)の本題に入る前に、「ノートからの転載」を挿入したハミルトンは、『講義』第2編第1章の本文のタイトルに脚注をつけ、この「転載」を同章の冒頭に入れた理由について、次のように説明している。「この第2編第1章の冒頭部分は、この講義のステュアート氏の原稿には存在しないので、その不足部分は、ブリッジ氏による大変豊富な内容のノートから可能な限り埋め合わせられ、特に引用に関しては、ボナー氏のノートによって適宜補われている」(Works VIII, 253 f.)。このハミルトンの説明から、「ノートからの転載」は、基本的にはステュアート講義の受講生のジョン・ブリッジの講義ノートが参考にされながら、ステュアートの主張の引用部分については、同じ受講生のジェイムズ・ボナーのノートから編集されたことが分かる<sup>2)</sup>。そして上の引用文に続けてハミルトンは、このふたりの学生のノートは類似していることから、これらのノートは「注意深く特徴づけられる」(Works VIII, 253 f.)と述べている。このことから、この「転載」が、『講義』第2編第1章のテーマである生産的労働と不生産的労働の一端を理解するための重要なものとしてハミルトンによって特徴づけられていることが分かる。

本稿では、この「ノートからの転載」の全容を解明し、この「転載」の主題とされている国富についてのステュアートの主張を明らかにすることにしたい。

## 第2節 国富とは何か

デュガルド・ステュアートは、この「ノートからの転載」の中で、生産的労働を考察するにあたって、最初に、国富、すなわち国民の富とは何かについて、この主題を取り上げる理由も含めて次のように説明している。

「私は、国民の富 (National Wealth) というフレーズについて、これまで何度か使用してきた際、普通に理解されるその用語の一般的で通俗的な意味として、この用語を用いてきた。しかし、政治経済学の最初の諸原理を分析することにおいて、可能な限りかなり正確に、この語句の明確な意味を確かめておくことは適切である。その目的のために、私は、国民の富というフレーズのさまざまな定義についての検討を、この講義の第2編に導入するだろう。なお、国民の富についてのさまざまな定義は、その長所と短所について比較して論じられながら、さまざまな著者たちによってこれまで提案されてきた。この主題の遂行において、私は、スミス氏が言う[重農]主義がフレンチ・エコノミストたちの言うそれと区別される言語と教義についての特徴的な特

---

2) 『講義』の編集のされ方については、荒井 (2016, 24-27) を参照。

デュガルド・スチュアートにおける「国富」とは何かをめぐって

色のいくつかを説明することになるだろう」(Works Ⅷ,253 太字は著者の強調を表す。以下同様。また[ ]は筆者の挿入を表す。以下同様)。

上の冒頭の一文から、スチュアートは、『講義』第1編「人口について」の中で、「国民の富」という用語を特にこだわらずに一般的に使われている意味で使用してきたとのことである<sup>3)</sup>。しかし、『講義』第2編の最初の章である第1章「生産的労働と不生産的労働について」では、第1編ではいわば曖昧にしてきた「国民の富」について、経済学の考察として、その用語の正確な意味を明らかにする必要があると述べられる。たしかに、スチュアートの言うように、アダム・スミス死後の18世紀末以降のブリテン国内において、経済学とは何かをめぐって、スチュアートの弟子たちであるエディンバラ・レヴェアールのひとりであるシドニ・スミスがその点に鋭く反応した人物もいたが (Winch 1983, 53, 訳, 48), 国じゅうを巻き込むほどに激しく熱心に論争されることはなかった。そもそも『国富論』という書物自体も、その当時に広く普及されたとはいえ、国民の間で、その内容について十分かつ正確に理解できたわけでもなかった (Teichgraber 2000, 101. Cf. Skinner 2003, 200-202)。もちろん、スミスの死後、地金論争や自由貿易論争などの経済上のさまざまな論争は見られたが、いわゆる経済学の方法論としての激しい論争が起き始めるようになったのは、およそ1820年代以降である。そのころから、イングランドでは、リチャード・ウェイトリを始めとして、オックスフォード大学を中心に、経済学の制度化についての議論が熱を帯び始めていた (只腰 2001, 2005, 2010 28-31 Cf. 荒井 2016, 10-12)。そのように考えてみると、1800年から10年間、スコットランドのエディンバラ大学でデュガルド・スチュアートが、経済学とは何か、富とは何かについて特別の注意を払い、富の定義をめぐって重農主義者やアダム・スミスの主張についてすでに言及していたことは、注目に値する。

デュガルド・スチュアートは、上の引用文に続けて、国民の富とは何かについて、このテーマにさらに立ち入って考察を進めている。以下で見るように、この点で興味深いのは、国民の富という言葉について、彼がその意味を狭く限定させていないことである。彼はオランダを例にあげて次のように述べている。

---

3) 上の引用文に見られるように、ここでスチュアートが、スミスによって論じられた「国富」を、Wealth of Nations (諸国民の富)ではなく、National Wealth (国民の富)とし、「国富」を複数形ではなく単数形で明示したことは着目するに値する。スチュアートは、この「ノートからの転載」の中で、個別具体的な国として、オランダやブリテンなどの一国の富に焦点を当てていることから、ここで意図的にそうした単数で国富を示そうとしたのではないかと思われる。ただし、その点については、「ノートからの転載」のみならず、『講義』第2編の第1章以降の内容についても注意を払いながら見ていく必要があることは言うまでもないだろう。

「スミス氏によれば、一国の富は、その国の土地と労働の毎年の生産物の交換価値に比例するものであり、労働という言葉において、製造業および農業の勤労の両方を明らかに含めている。この見解について、私は目下、異議を唱えようとも思わないし、すべての考えられる場合に、国富が農業生産物であるというフレーズを使うことに限定しようとする気もない。オランダ人が裕福な国民であるということを否定することは、明らかに言葉の乱用であろう。なぜなら、オランダ人の生存手段は、もっぱら外国から得られているからであり、あるいは、政策についての同様のシステムがさまざまな国において実行不可能だからである。これらの状況の結果として、オランダの富は、疑いの余地なく、農業国の富よりもずっと自立していないのである。すなわちそうしたオランダの富の例が、人類の一般状態にまったく適用できないということは明らかである。しかし、オランダ人が他の諸地域の生産物についての完全な支配をし続ける限り、オランダの富は、他の国々の富とは異なるのであって、それは、裕福な資本家の富が、土地の耕作者の富とはただ異なるものとしてそう言えるのである。たしかに、国家的な視点から見れば、その違いは、大きく重大なことが分かるだろう。だが、これまで見てきたところから考えられる限りでは、スミス氏の表現を何とかして正当な言い方に直すことが可能な場合に、彼の表現に難癖をつけることは不適切であろう」（Works VIII, 255-256. 下線は筆者の強調。以下同様）。

スチュアートによれば、アダム・スミスが述べる一国の富とは、上の引用文の冒頭の一文目に見られる通りである。これに対し、そうした意味をもつとする国富に関するスミスの定義について、スチュアートは今は異議を言うつもりはなく、難癖をつけることも不適切であると述べている。以下で見るように、これらのスチュアートの表現は、彼が国富についてのスミスの定義について十分に認めようとしていないことを表している。その一方で、一国の富について「私は……国富が農業生産物であるというフレーズを使うことに限定しようとする気もない」とも述べられているように、農業生産物こそが富であるとする重農主義者たちによる国富の定義についても、同意していないかのような言い回しがされている。

ここで注目すべき点は、スチュアートによって、農業生産物だけが唯一の富ではない国として、オランダが例にあげられていることである。具体的に記されているわけではないが、地形的な問題からであろうか、農業生産に適さないオランダでは、国内の農業生産だけでは国民の生活を守ることは難しいと論じられているようである。「裕福な資本家の富が土地の耕作者の富とは異なる」と記されているように、オランダは、農業国や製造業国のような他の国々とは異なる富をもたらしていると述べられている<sup>4)</sup>。

---

4) オランダが国内の農業や製造業以外の分野でいかに経済的利益をあげているのかについて、

デュガルド・スチュアートにおける「国富」とは何かをめぐって

周知のように、アダム・スミスが述べる国富というのは、生活資料であり、富の源泉は労働であるということ、そしてその富を多く生むためには、多くの割合の生産的労働者が必要とされる。だが、もしスチュアートの主張の立場に立つならば、農業や製造業によって必ずしも多くの富をもたらすとは限らないとされるオランダは、上の引用文の冒頭に見られる「製造業および農業の勤労の両方」を含む必要があるとされる一国の富の概念に当てはまらない国になる。同様に、こうしたオランダの例から、重農主義者たちが論じた富の定義についても、農業のみを富とみなしている点で正確ではないというのが、上の引用文におけるスチュアートの主張のように見受けられる。

上の引用文に続けて、スチュアートは、国富の原因として、生産的労働がいかなる意味をもつのかについて、次のような内容から議論を進めている。

「したがって、国富の大きな源が人間の勤労であるとされて以来、あらゆる社会の富裕は、次の2つの状況によって定められるに違いない。第1に、有用な労働に雇用される人々の数が、そうした有用労働に雇用されない人々を生じさせる割合によってである。第2に、この有用な労働に求められる熟練 (skill)、腕前 (dexterity)、ならびに節約 (economy) によってである。スミス氏によってまさに考察されていることは、前者よりも後者にいっそう力点が置かれているように思われる。

これらの考察は、効果的な労働力におけるこの相違がいかなる原因によるものであるのかという探究を自然に示している。私は、後で示す理由から、スミス氏によって用いられた「生産的な」(productive) という用語の代わりに、「効果的な」(effective) というこの用語を用いてきた」(Works VIII, 256)。

上の引用文の前半の内容は、アダム・スミス『国富論』の「序文および本書の構想」の冒頭部分で生産的労働とは何かについて論じられた部分と重なる。スチュアートによれば、国富は、第1に、有用労働に雇用される労働者の数が、有用労働に雇用されない労働者の数との割合によって決まるということ、第2に、有用労働の熟練、腕前、節約の度合いによって、それぞれ決まるということである。そして、彼の視点では、アダム・スミスは、社会の富の決定要因として、生産的労働者の数を増やすことよりも、分業による生産性の質の向上を重視したと言う。この最後の点は、スミスの同「構想」の中でそのように述べられていることから、スチュアートの認識は間違っていないといえる。上の引用文の後で、製造業の生産的労働を説明する良い例としてスミス

---

スチュアートはここで詳細に論じているわけではないが、17世紀のオランダにおいて、経済思想史の観点からニシン漁の海洋貿易や交易がいかに秀でていたのかを精緻に考察したのとして、伊藤 (2014, 79-91)、Ito (2020, 29-45, 52-77) を参照。

の分業論が取り上げられていることから、分業労働に必要とされる熟練や腕前が有用労働において特に重要であると、スチュアートによって把握されていると読み取れる。

しかし、上の引用文で、スチュアートによって取り上げられたスミス『国富論』の「序文および本書の構想」の冒頭部分の内容は、その実際の内容とは異なる。第1に、些細な点ではあるが、上の引用文で取り上げられている生産的労働者の数の割合と労働の技術的な質については、実際の「序文および本書の構想」では、それぞれ論じられている順番が逆である。第2に、有用な労働に求められる「熟練、腕前、節約」については、実際の同「構想」では、「熟練、腕前、判断力」と記されているように、本来「判断力(judgement)」である用語が「節約」とされてしまっている。スチュアートは、上の引用文に見られる同「構想」の内容を直接引用しているわけではないが、実際のスミスの主張を正確に取り上げていないことは看過できないだろう。

そのほかに上の引用文で興味深い点は、スチュアートが、スミスによって論じられる有用労働を、「生産的な」という意味ではなく、「効果的な」という意味の方がその労働に相応しい言葉ではないかと論じている点である。マルサスは、『経済学における諸定義』(1827)の中で、幅広い時代を網羅して、生産的労働や不生産的労働の論点も含めて、スミス、セイ、マカロックなどの主張と関わらせながら、価値や効用について論じられた論点と関わらせて経済学の定義についてさまざまな角度から考察しているが、その著の全体を通じて生産的労働を「効果的」と考える主張についてまでは言及していない(Malthus 1827)。スチュアートがなぜ生産的労働を「効果的」と言うのかについては以下で考察する通りであるが、上の引用文の内容だけから見ても、スチュアートが、生産的労働についてのスミスの捉まえ方と異なる把握をしていることが分かる。

それではなぜ、スチュアートは、そうした有用労働を「生産的」ではなく「効果的」とみなすのであろうか。その問いに答えるための有効な手がかりは、以下の引用文から見出すことができる。

「人間の勤労が行われるどのようなものであっても、その人間の労働生産物は、労働者の消費によって必ず負わせられるのである。したがって、勤労のいかなる種類の生産力を調べることに於いて、人間の勤労が社会の所有物の量、効用、ならびに交換価値につけ加えるかどうかを考察する以前に、それ自体についての先決すべき問題は、その人間の労働生産物が、その人間の勤労が維持される必要な消費を支払う手段を提供しているかどうか、ということなのである。この点において、農業が卓越していることは明らかに顕著である。農業で用いられる基金は、なんら下がらずに持続するだけでなく、大地から引き出すことができる追加の生産物によって、それ以上に置き換えられることになるからである。この剰余生産物の結果として、一般的収入は増大し、

それ以前において等しくなかった支出分を支払うことを可能にするのである。したがって、生産的な (productive) という形容詞は、その一般的収入が高められる労働と支出にもっとも正当に当てはめられるのである。製造業の労働にかんしては、その事情は異なる。というのも、製造業労働者の活動によって、彼の取引となる材料は、さらにいっそう有用になるけれども、彼が、それにより国の収入を増やすということにはならないからである。この収入は、国の消費となる基金なのである。またこの収入は、製造業労働者のいかなる活動によっても増加しないのであり、そうした活動は、より大きな消費の手段を提供していないのである。工匠の仕事がこのような供給を何も生んでいないということは、明白である。その工匠は、自分自身の生存の価値以外に、自分の労働によって作られる材料にいかなる価値も付け加えていないのである。彼は、その材料が生きる目的とするようにするために、ただ材料の形を変えているだけなのである。それゆえ、この点で、工匠の労働というのは、有用ではあるけれども、農夫の労働と同じ意味で一般の収入に何も加えていないのである」(Works VIII, 260)。

上の引用文の内容を整理しよう。冒頭で示されているように、スチュアートの説明によれば、農業労働であっても製造業労働であっても、労働による生産物は、労働者の消費に結びつくということである。それゆえ、勤労のいかなる種類の生産力というのは、「社会の所有物の量、効用、ならびに交換価値につけ加えるかどうかを考察する」以前に、もっとも重要なことは、生存に維持される必要な消費を支出する手段を供給することが可能かどうか、ということなのである。その意味で、農業は傑出している。農業生産物は大地から常に再生産される。そうした点から、農業は、余剰生産物の創出によって、一般的収入が増加され、生存を維持するための消費支出を可能にする。その点で、農業の勤労は、生産的労働という名にもっとも相応しいということになる。その一方で、製造業労働においては、農業労働の生産性とはその意味が異なる。製造業労働は、その労働によって材料が作られるが、その材料によって国の収入を増加させることはない。なぜなら、製造業労働は、農業労働のように消費の手段を供給するものがないため、国の収入に何ひとつ富を増大させていないからである<sup>5)</sup>。

---

5) なお、上の引用文の中で労働によって投じられる対象として「原料・材料 (materials)」という言葉が使われていることについて、若干補足しておきたい。これは、アダム・スミスの『国富論』においても同様の言葉の使われ方として、労働が投下される対象として material という言葉が使われている。19世紀前半のリカードウの場合には、materials は「生産」や「商品」という用語になるが、デュガルド・スチュアートの場合も、スミスと同様の言葉の使い方をしていく。この点に関連して、アダム・スミスとデイヴィッド・リカードウの価値論の違いについて、employ (使用する) と bestow (投下する) の理解が必ずしも的確ではなかった点について考察したものとして、星野 (2010, 7-57)、星野 (2016, 17-19) が詳しく明快である。そのさらなる発



これらの内容に見られるように、スチュアートにとって、国の一般的収入は、「国の消費となる基金」とされるため、製造業労働によって、たとえその国により多くの収入を増やしたとしても、その収入が消費に結びつかなければ、国の一般的収入の増加とはみなされない。スチュアートの考えによれば、工匠においても、自らの労働によってある材料を作り上げたとしても、そのことが消費の手段を何も供給していないため、国の一般の収入に何も富を付け加えていないことになる。

このことから、スチュアートにおいて、「生産的労働」というのは、生存に維持される必要な消費を支出する手段を供給する労働と考えられていることが分かる。農業労働においては、その余剰生産物から人々に食糧品を供給することを可能にするため、農業労働は、国の収入を増加させる。その一方で、製造業労働においては、生存に維持される食糧品を供給しているわけではないため、そうした消費の手段の供給ができないことから、国の収入に何も富を加えていないことになる。したがって、スチュアートの考えでは、製造業労働は生産的労働とはみなされないのである。上の引用文に続けて、生産的労働についてのスミスの主張を念頭に置きながら、スチュアートは次のように述べている。

「しかし、工匠の労働こそがまさに生産的であるということを執拗に主張する著者たちは、工匠の労働が大地の生産物の交換価値を増加させるだけであるということをおそらく言おうとしているのではないと思われる。この意味で、スミス氏が、生産的という用語を用いているのは、製造業の勤労の生産的諸力を増加させることにおいて、外国商業の起こりうる効果について述べる場合であることは明らかである。したがって、私は、そうしたスミスの主張の生産的という用語に限って見た場合に、その主張がどれほど真実であるのかを、これから考察することにしたい。

人間の勤労によって製造されるあらゆるものの交換価値は、二つの状況、すなわち、元の原材料の価格と、元の原材料にこれまで用いられてきた労働の価格に依存する。この労働の価格は、労働者の必要不可欠な消費によって引き起こされる支出からもっぱら生じるのである。そしてこの支出は、まったくもってして工匠が原材料につけ加えうる交換価値であり、彼がさらに支出を求めようとしないようにする他の者たちとの競争でもある。それゆえに、工匠がこの原材料につけ加えるどんな価値であっても、彼は、それと同じだけの社会の他の基金を破壊しており、もしそうでなければ、社会の他の基金がこれまで破壊されてきたことと同じくらの交換可能な収入すべてをなくさせているのである」(Works VIII, 260-261)。

---

展的研究については同著者から多く示され、アダム・スミスの理論研究に多大な影響を与え続けている。

ここで見られるように、製造業の勤労によって製造される商品の交換価値は、「元の原材料の価格と、元の原材料にこれまで用いられてきた労働の価格に依存する」という。「この労働の価格は、労働者の必要不可欠な消費によって引き起こされる支出からもっぱら生じる」とされているように、製造業労働の価格が、生存するために必要な消費支出から決まると考えられていることがわかる。そして、製造業労働者の必要不可欠な消費のための支出は、「工匠が原材料につけ加えることができる交換価値」であると述べられていることから、スチュアートの考えでは、製造業労働者たちの労働の価値は、農業労働者たちに購買・支配させることができる農業生産物をつくる労働の量に等しいということになるであろう<sup>6)</sup>。製造業労働者たちの労働の価値が交換価値であると言うことができるのであれば、彼らの自分たちの労働生産物としての商品の交換価値の実質的尺度が、支配労働量によって示されるとする場合には、支配されるべき他の商品生産者、例えば農業生産者であるならば、農業生産者が農産物を作るための労働量はその対象となる。だがその場合に、その商品の交換価値の実質的尺度として、農業生産者の労働量は何を基準として測られるのかが明らかにされなければならない。この基準について、アダム・スミスは、正確ではなくても日常生活の中における「市場のかけひきや交渉によって調整される」と述べたが、スチュアートの場合は、「ノートからの転載」の中で何も触れられていないため、その解釈については不明である。スチュアートにおいては、製造業労働者たちの労働生産物としての商品の交換価値の実質的尺度は、農業労働者の農業生産物であると、大まかに捉えられていることは確かであろう。

上の引用文の最後のパラグラフの内容に戻ろう。上述したように、スチュアートによれば、工匠の労働の価格は、彼の必要不可欠な消費によって生じる支出に完全に起因するのだが、それに続けて、この工匠が必要不可欠な物を消費するための支出について、「彼がさらに支出を求めようとしないようにする他の者たちとの競争でもある」と記されている。具体的に説明されているわけではないが、その工匠以外の人たちも同じように、自分の生存にとって必要不可欠な農業生産物への消費のための支出が行われることから、彼らの間で、自分たちの消費支出を互いに抑制しあう競争であると言われているように思われる。工匠たちが、原材料を製造して製造品をつくり、農業生産物と交換するための価値(=交換価値)を生んだとしても、彼らの消費支出によって、国の収入となる農業生産物の富を減少させることから、社会全体の基金は減少さ

---

6) 「ノートからの転載」では、上の引用文の中で説明された交換価値を基にして、投下労働と支配労働の違いなどについては一切触れられていない。そのため、彼がここで持ち出した交換価値の概念をどのように理論展開させたのかについては、「ノートからの転載」の後で論じられる『講義』第2編第1章以降の内容から確かめる必要があることは言うまでもないだろう。

れることになるというのである。

### 第3節 製造業における利潤の把握をめぐって

製造業労働者たちの労働が農業生産物と交換するための価値を生むとしながらも、農業生産物への彼らの消費支出が国富を減少させると主張するスチュアートは、スミス『国富論』をいかに解釈して、なぜそのような結論に至ってしまったのであろうか。スチュアートは、「ノートからの転載」の中で、アダム・スミスによって論じられた、製造業労働者の労働が国の収入を増加させる点について言及している。スチュアートが「ノートからの転載」の中で特に言及したのは、『国富論』第4編「政治経済学の諸体系」第9章の重農主義の項の中で論じられた、レース職人が亜麻の価値を大幅に引き上げるレースの製造業の例や、工匠、製造業労働者、商人の労働が、その国の実質収入を増加させること、すなわちその国の土地と労働の年々の生産物の実質価値を引き上げる内容についてである。スチュアートは、その中で、工匠が価値を生じさせる生産過程の中で、兵士や家事使用人によって穀物や他の必需品が消費されたとしても、この工匠が生産するものの価値は、彼が消費する価値よりも大きいとはいえないとしても、市場に実際に存在する品物の価値を高めていると論じたスミスの主張を引用している（Works Ⅷ, 262-263）。それに対して、スチュアートは次のように述べている。

「もし私がこの議論の概要を完全に理解するならば、それはこれまで消費されてきたものの価値は20ポンドに等しいということだけを意味している。しかし問題なのは、国民が利益を得られたかどうかということなのである。消費される穀物の10ポンドの価値は、どれだけ費用がかかっても再び用いられることができないし、またそれゆえに、国民の収入にいかなる増加をもたらすということもできないのである。なおその国民の収入というのは、国民が支払うことができる支出の量という別の表現にすぎないのである。スミス氏がいつそう強調するのは、工匠たちの労働が、その支出に等しい価値を生み、また彼らの労働を用いる資本を使い続けるということなのである。この点で、彼らの労働は、何も収入を生んでいない家事使用人たちの労働とは本質的に異なっている。だが、私が考えざるをえないこのことは、この思慮深い著者（スミス氏－荒井）が、交換の媒介としての貨幣の使用によって導かれていった誤りなのである。工匠は、自分の労働生産物を買っており、さらに続けて表面的に言えば、その彼は、農民の収穫物から報いを受けることによって、その農民と同じ位に、自分の資本を効果的に置き換えているように思われる。また実際に、そうした工匠や農民は、個人に関する限りで、完璧に類似している。しかし、一般には、彼らは、自分たちの

社会関係において非常に異なっている。農民が生産する穀物は、自然からの自由な贈り物 (free gift of nature) であり、社会に対して何も費用がかからないのである。一方、製造業労働者は、以前は家財用品の目的に役に立たなかったものを変形させながら、自分が作る商品の形をただ変えているだけなのである。しかし、製造業労働者がそのように自分の商品を作る場合に、彼は、一般のストックから自分の生存手段を引き出している。彼は、自分自身の労働生産物によって自らの生存に対して直接支えられていないのである。もしその製造業労働者が、他の人たちとのすべての社会的交流から断ち切られたならば、彼は、自分の生存が維持される資本を再び作り出すことが何もできなかったことであろう。製造業労働者の仕事は、自分自身に対して絶対的な価値が何もなく、他の人たちから生存を得る手段でしかないのである。というのも、そうした他の人たちも、自分たちの二次的欲求の満足のために自分たちの余剰品を交換するからである。それゆえに、工匠の資本は、彼の収入のいくらかを使う誰か他の人によって取って代わられているのである」(Works VIII, 263)。

ここでもスチュアートは、工匠がその国の土地と労働の年々の生産物に10ポンドの価値を付け加えたと主張するスミスの見解について、消費される穀物の10ポンドの価値が再び用いられることができないことから、その価値が国民の収入を増加させないと述べている。すなわち、既に取り上げたスチュアートの引用文の内容に見られたように、製造業の労働が、生存に維持される必要な消費支出を提供していないことから、その価値が国民の一般的収入に何も富を増加させていないと言うのである。上の引用文に見られるように、スチュアートは、家事使用人たちとは異なるとして、工匠たちの労働が価値を生むとするスミスの主張を取り上げながらも、スミスによって論じられた、職人たちが原料に付加する価値についての資本蓄積と利潤との関係について把握できていないのである。スミスは、『国富論』第1編第8章「労働の賃金について」の前半部分の中で、職人たちの賃金の出所を明快に示していた。すなわち製造業の分野では、大部分の職人は、その仕事の原料とそれが完成されるまでの生活維持費(賃金)を、彼の親方によって前払いされるということである(Smith 1776, vol. I, 83, 訳, 一, 120)。そしてそうした点から、スミスは、職人たちが原料に付加する価値によって、彼らが自分たちに支払われる賃金と、彼らの雇い主が前払いした原料と賃金との全資本に対する雇い主の利潤を支払う点について明確にしたのであった。

その一方で、スチュアートの場合には、製造業分野の賃金のあり方について、そうしたスミスの考えとは大いに異なる。上の引用文の「製造業労働者は、以前は家財用品の目的に役に立たなかったものを変形させながら、自分が作る商品の形をただ変えているだけなのである」という一文は、製造業労働者の労働価値の視点をまったく欠いた表現であると言わざるをえない。また、上の引用文の中の「製造業労働者がその

ように自分の商品を作る場合に、彼は、一般のストックから自分の生存手段を引き出している」や、「彼は、自分自身の労働生産物によって自らの生存に対して直接支えられていないのである」という主張もまた、製造業労働者たちが利潤を生みだしていないことを端的に示している。すなわちスチュアートによれば、製造業労働者たちにおいて、「一般のストック」、すなわちどこかに予め蓄積されているストックが資本になりうることから、そのストックによって、彼らの生存が支えられていると言うのである。だからこそ、上の引用文に見られるように、工匠は農業生産物を消費することによって自らの資本を効果的に置き換えているのである。スチュアートが有用労働を「生産的」ではなく「効果的」とみなすのはまさにこうした理由からである。そうした点から、製造業労働者は、自分の生存が維持される資本を再び作り出すことが何もできないとされ、「彼の仕事は、自分自身に対して絶対的な価値が何もなく、他の人々から生存を得る手段でしかない」と結論づけられてしまうことになるのである。

すなわちスチュアートにおいては、製造業の親方たちが職人たちの仕事の原料とそれが完成されるまでの彼らの賃金を前払いすると論じたスミスの主張について、理解・把握されていないのである。それは、政治経済学講義が開講される1800年以降に生きたスチュアートにおいて、スミスにも通じるところでもあるが、資本主義の歴史的形態規定を明確に区別できなかったことがその理由としてあげられる。スチュアートは、資本家が独立小商品生産者である職人を雇用して生産する様式と、職人が自分のストックを使って生産する様式との異質性を十分に認識できていなかった。こうした点から、スチュアートの考えでは、製造業労働者の労働の価値によって利潤を生み出すという発想がそもそもないということが露わになるのである。

#### 第4節 スチュアートの重農主義的性格

工匠の労働がより多くの消費の手段を供給していないと述べるスチュアートは、上の引用文に続けて、その具体例として次のように述べている。

「例えばもし、私が、すべての支出を差し引いた後で、穀物の収穫物を収穫すると仮定した場合に、手元に20ブッシェルが残れば、私はそれと交換可能な量のレースと交換すると仮定しよう。この収穫物の20ブッシェルは、レース製造業労働者の品物の生産物に使われた一方で、彼の消費にほぼ等しいものである。それゆえ、彼の生存が満たされるのは、彼の労働によるのではなく、私が土地から取り出した生産物によるものなのである。私が彼の労働賃金を彼に前払いしたことであるかのように、彼は、私の労力によってその時間の間じゅう生活しているのである。実際に、彼を雇う資本は、彼が作ったレースではなく、私とそのレースのために彼にすでに支払った

デュガルド・スチュアートにおける「国富」とは何かをめぐって

20ブッシェルの穀物なのである。したがって、彼の前払いが払い戻されていることから、その結果として、彼の労働は、これまで用いられてきた資本に取って代わるということにはならないのである。問題なのは、彼の労働が、私が用いてきた資本と置き換わっているかどうか、また、私がこれらの20ブッシェルを高めることに被った支出を支払っているかどうか、ということなのである」(Works VIII, 263-264)。

上の引用文に見られるように、スチュアートによれば、製造業労働者の生存は、彼の労働によるのではなく、農業労働者が支払った20ブッシェルの穀物の生産物によって維持されることになるということである。すなわち製造業労働者は、穀物を生産する農業労働者の労力によって、生活が維持されることから、その農業労働者がその製造業労働者の賃金を前払いしたことと変わらないということなのである。上の引用文の中で「彼の前払いが払い戻されていることから、その結果として、彼の労働は、これまで用いられてきた資本に取って代わるということにはならないのである」と述べられているように、製造業労働者の労働は、その製造業の資本からではなく、農業労働者の労働によって生活が維持されるというのである。

スチュアートがそのように述べる具体的な理由は何であろうか。製造業の労働を農業労働と同じ意味で生産的労働と見ようとししないスチュアートは、エコノミストたちの主張に従って次のように述べている。

「すでにいわれているところによれば、製造業の工程というのは、自分たちの家財用品のために自分たちの労働を進んで行おうとする人々に対して、土地所有者たちによって支払われる俸給 (a salary) の点のみから判断されるということ、また、工匠たちの賃金が単なる富の移転 (transference of wealth) であるということのようである。ここでその際にエコノミストたちが言うには、社会全体というのは、ものごとの本質によって基づけられる必要によって、互いにとってそれぞれ有用な両者である二つの階級 (two classes) へと分けられる。その二階級のうちの一方は、その労働によって、絶えず新しい富を作り出す、あるいはむしろ大地からその富を引き出す階級である。そしてそのことは、社会全体に生存手段と、すべての人々の不足している必要なものを供給するのである。もう一方の階級は、より大きな交換価値のものにするような準備と行いによって原材料に手を加えることで雇用される人たちである。その階級は、前者 [農業労働者たち] に自分の労働を売り、その見返りとして自分の生活の糧を受け取るのである。第1のものは、生産的と言われ、第二のものは有給者 (stipendiary) と呼ばれるといえよう」(Works VIII, 265)。

上の引用文では、エコノミストたちの主張が参考にされながら、農業労働と製造業

労働の2階級の生産的労働の特徴の違いについて論じられている。農業労働者の階級は、労働によって、大地から農業生産物を生産し、絶えず新しい富を形成し、社会全体に生存手段となる農産物をすべての階級に供給する。その一方で、製造業労働者の階級については、農業労働とは同じ意味での生産的労働とはみなされず、「有給者(stipendiary)」と名づけられるのである。上の引用文の冒頭によれば、製造業の工程は、土地所有者たちが農業労働者たちに支払った賃金から判断される必要があると考えられている。製造業労働者とされる工匠たちの労働のプロセスは、土地所有者たちが農業労働者たちに支払う賃金を起点に、農業労働者たちによる製造業の商品の購入を通じて工匠たちの生存が維持されることから、工匠たちの賃金は、「富の移転」として捉まえている。この点で、特に象徴的な言葉が、上の引用文の中で記される「工匠たちの階級は、前者[農業労働者たち]に自分の労働を売り、その見返りとして自分の生活の糧を受け取るのである」という一文である。工匠たちは、農業労働者たちに自らの労働を売るとされ、その見返りとして、農業労働者たちが生産した食糧品の返礼を受けるというのである。こうした主張は、生産的労働についてのアダム・スミスの捉まえ方とは大いに異なることはもちろんのこと、むしろスミス以前の重農主義の考え方に後退しているのではないかという印象を受けざるをえないだろう。

以下では、「ノートからの転載」の後半部分を読み解きながら、生産的労働についてのスチュアートの見解の結論を見ていくことにしたい。その内容について見る前に、上の引用文に見られる「工匠たちの賃金が単なる富の移転であるということなのである」とは何かについて触れておきたい。以下の引用文に見られるように、スチュアートが、商人の利益についても同じ表現を用いて「富の移転」であると述べている点は注目に値する。

「同じ考察は、商人たちと親方製造業労働者たちの利潤にも等しく当てはまる。このような人たちがいない国家を思い浮かべることは、容易である。そうした国家では、土地所有者たちは、製造業で雇用される労働者たちを管理し、財貨が生産される場所から市場へその財貨を輸送する。このような[管理や輸送の]手続きの形態に伴う困難と浪費(trouble and waste)は、この事業分野に着手する人々に対して、その財貨をより高い価格にさせ、彼らに必要不可欠な前払いを土地所有者たちに行わせようとするのである。この価格の上昇分は、明らかに、俸給(salary)であり、また商人の利益は、移転(transference)であるが、富の産物ではないのである。同じことは勤労のあらゆる種類についてもいえるかもしれない、その対象は、大地の生産物の量を増加させることなしに、大地の生産物を変えさせているということなのである。この状況において、製造業の労働者たちや商人たち全員が同意するのは、彼らが最高度に有用であり、彼らの多くが、[社会全体において]絶対に必要不可欠であるけれども、

一般的な収入に何ひとつ加えていないという点である。彼らは、国民の富を分配する重要な目標を達成するが、全体的に不生産的なのである。彼らは、国民の収入に何も付け加えていないが、逆に、大地の生産物を所有する人々から自分たちの援助の手段を引き出している。したがって、エコノミストたちによれば、この大地の生産物は、唯一の国民の富なのである。そしてそうした大地の生産物を生産する労働者こそが、唯一の生産的な労働者であり、唯一の国の収入の源なのである」(Works Ⅷ, 266-267)。

上の引用文の冒頭で論じられる商人たちや親方製造業労働者たちがいない国家が想定されるとする内容は、少し分かり辛いものである。だが、この冒頭の内容を立ち止まって考えてみると、スチュアートの主張の真意が見えてくるものがある。というのも、もし商人たちや親方製造業労働者たちが存在しない国家を思い浮かべることが容易であるというのは、これらの人物たちがいなくても、土地所有者や農業労働者たちこそが唯一の富をつくるというスチュアートの主張の明白な意思が透けて見えるからである。

上の引用文において、土地所有者たちが、「製造業で雇用される労働者たちを管理し、財貨が生産される場所から市場へその財貨を輸送する」と述べられている内容は、仮定のこととして論じられるとはいえ、商人たちや親方製造業労働者たちよりも土地所有者たちが市場の中で中心的な役割が与えられていると読み取れる。商人たちと親方製造業労働者たちへの管理や輸送の手続きに伴う土地所有者たちの困難と浪費は、それにより、商人たちと親方製造業労働者たちの財貨を高くさせると言う。そしてこの価格の上昇分が製造業労働者たちの「俸給 (salary)」とされるのである。厳密に論じられているわけではないが、管理や輸送の手続きに伴う土地所有者たちの困難と浪費は、商人が売る財貨の価格にも含まれることから、その困難と浪費による価格の上昇分は「商人の利益」となる。それゆえこの「商人の利益」は、土地所有者たちからの富の「移転」と把握されるのである。そしてこの困難と浪費に伴う価格の上昇分が「富の産物ではない」というのは、製造業労働者たちと商人は、農産物の量を何ひとつ増やしていないことから、国の収入に何も富を増加させていないということの意味しているものと考えられる。

上の引用文において「彼らは、国民の富を分配する重要な目標を達成するが、全体的に不生産的なのである」と記されているように、製造業労働者たちと商人は、社会にとって必要不可欠な存在であるけれども、農業労働と同じ意味で生産的労働とみなされていないということの意味する。そうした彼らが、「大地の生産物を所有する人々から自分たちの援助の手段を引き出すのである」と記されているように、製造業労働者たちと商人は、農業労働者たちが生産した農業生産物によって自分たちの生活が支



えられることから、まさにその農産物こそがエコノミストたちが言う「唯一の国民の富」ということなのである。それゆえ、農業生産物を生産する労働者、すなわち農業労働者こそが「唯一の生産的な労働者であり」、国民の収入を増加させる唯一の存在ということになるのである。

スチュアートは、このように述べた後で、この第1章の「ノートからの転載」の末尾において、この主題について次のように結論づけている。

「したがって、結論づけられてもよいことは、農業主 (agriculturist) の労働が唯一の生産的労働であるということ、土壌から生まれる自然の生産物が唯一の国民の収入であるということ、すなわちそれは唯一のファンドであり、そのファンドの中からすべてのその支出が支払われるに違いないということなのである。

重農主義 (the Economical system) に関して、私がこれから考察する議論を始めにあたって、重農主義の創始者たちの考えの後の時代に、可能な限り忠実に描き出された重農主義の基本的諸原理の一般的な概要から考察を始めていくことが、私にとって適切であるように思われた。この種の議論は、重農主義の本質についてのその創始者たちの考えの誤解を正すために不可欠であるように考えられた。なお、そうした誤解は、重農主義についてスミス氏によって説明された結果として、かなりの程度まで広まっていったのであるが。私は、それらの論点についてこれから詳しく考察を進めようと思っている。それらの論点において、ケネーと彼の後継者たちの教義が、『国富論』において、スミス氏によって論じられた彼らの教義とは異なっているように思われるからである。そして私は、実際の多様な見解を、言葉上の単なる論争から可能な限り切り離そうと努め、どちらの意見をそのまま鵜呑みにすることなく、それぞれの主張において有益であるように思われる考えを結びつけるようにして取り組みたいと考えている」(Works VIII, 268-269)。

上の引用文の前半部分で見られるように、富を生む農産物を作り出す農業労働こそが、国民の収入に付け加える唯一の生産的労働であると、スチュアートは結論づけている。そして重農主義は、アダム・スミスによって広められたが、その内容において誤解を生じさせていると言うのである。それゆえ、スミスとエコノミストたちの両者の考えを相互に結びつけながら、この教義を正確に考察していくことが重要とされるのである。

上の引用文において、農業労働こそが、唯一の国民の収入を生む点で、唯一の生産的労働であると論じられている点は、「ノートからの転載」におけるスチュアートの結論として重く見る必要はあるだろう。しかし、この部分のみを見て、彼が重農主義を唯一の生産的労働であると断定するには尚早であると思われる。その理由2つある。

デュガルド・スチュアートにおける「国富」とは何かをめぐって

1つは、上の引用文に見られるように、生産的労働をめぐる重農主義の系譜の教義とアダム・スミスの教義について、これから詳細に考察すると述べられているからである。その意味で、「ノートからの転載」は、生産的労働についてのスチュアートの正確な理解を示すための前段階にすぎないということを念頭に置く必要がある。

2つ目は、国富ないし生産的労働についてのスチュアートの主張が必ずしも明確ではなかった点である。特に、オランダの国富についてのスチュアートの把握は、「ノートからの転載」の結論部分の内容と必ずしも整合しうるものではなかった。本章の中でも触れたように、スチュアートは、「ノートからの転載」の中で、オランダの国富は、農業でも製造業でもなく外国からもたらされる富であると言及した。先述したように、スチュアートは、「国富が農業生産物であるというフレーズを使うことに限定しようとする気もない」と述べていた。この彼の主張は、農業生産物こそが富であるとする重農主義者たちによる国富の定義についても完全に同意していないことを示していた。「ノートからの転載」では、その後、その内容について再び論じられることがなかったため、この点のスチュアートの捉まえ方は判然としなかった。このことは、本稿の冒頭で触れた『講義』が論理立てて論じられていない点と関係する。スチュアートにおいて、オランダの富が農業によるものではないとするならば、唯一の国民の収入を生む労働が、農業労働であると言うことはできないだろう。その意味で、スチュアートは、農業労働こそが唯一の国民の富を生むという点では、重農主義者たちの考えとほぼ同じであった一方で、彼が国富の概念をめぐって重農主義者の主張を全面的に同意していたとは言い難いといえるだろう。

これら2つの理由から、生産的労働についてのスチュアートの主張をさらにいっそう明らかにするためには、本章で扱った「ノートからの転載」の後に収められている『講義』第2編第1章(1)「特に重農主義に関して」について詳細に検討していく必要があるだろう。

## 第5節 おわりに

「ノートからの転載」全体の考察を通じて、『講義』第2編の「国富について」の冒頭に収められた「ノートからの転載」の全容、ならびに、国富や生産的労働についてのスチュアートの主張の基本的な特徴については次第に明らかになってきた。スチュアートが、製造業における資本の利潤と製造業労働者に支払われる賃金とを原理的に異なるものとして区別できなかったことは、彼の重農主義的性格を示す1つの大きな要因になったといえるだろう。逆に言えば、その点を明確に区別したのが、経済学史上のスミス『国富論』の大きな貢献であったということもできる。スチュアートが重農主義的な性格を有していたことは、彼の経済学の基本的構造を理解するうえでも、

『講義』第2編の「国富について」の生産的労働と不生産的労働の主題を読み解くうえで、重要な意味をもつといえる。

本稿で見たように、デュガルド・スチュアートは、アダム・スミスによって論じられた生産的労働の考えに異を唱え、独自の視点から生産的労働を捉まえようとしていた。「ノートからの転載」の全体から見れば、スチュアートの生産的労働の視点は、農業こそが唯一の富を生むとみなす重農主義の考えに近いものがある。スチュアートは、概ね、重農主義的な立場に立っていたが、彼の生産的労働の捉まえ方は、その理論の通説からみれば異質なものであった。製造業の有用労働を「生産的」としてではなく「効果的」と捉えたスチュアートは、生産的労働についてのスミスの考えとは見解を異にした。このことは、本稿で示したスチュアートの主張が、資本に雇用される労働が生産的労働であるとするアダム・スミスの考え（『国富論』第2編第3章）とは異なる不十分な解釈であったことが明るみになった。

既に述べたように、生産的労働に関するそうしたスチュアート独自の立場を、ここで断定的に明示するにはまだ早いだろう。これまで繰り返し述べたきたように、本稿で示したスチュアートの生産的労働論は、『講義』第2編の第1章「生産的労働と不生産的労働について」の冒頭に収められた「ノートからの転載」の内容にとどまるものだからである。この「ノートからの転載」の後で論じられる(1)「特に、重農主義について」以降のこの主題の内容全体を扱わなければ、彼の正確な主張を掴み取ることはできない。その意味でも、本稿は、『講義』第2編第1章を考察していくための予備的考察にすぎない。スチュアートの生産的労働論の考察をいっそう進めていくことは、今後の急務の課題である。

本稿は、日本学術振興会「科学研究費補助金（基盤研究C）、課題番号：21K01414」による研究成果の一部である。ここに記して感謝申し上げる。

## 参照

- 荒井智行（2016）『スコットランド経済学の再生——デュガルド・スチュアートの経済思想』、昭和堂。
- 伊藤誠一郎（2014）「一七世紀イングランドのトレイド論争——オランダへの嫉妬、憧れ、警戒」  
田中秀夫編『野蠻と啓蒙——経済思想史からの接近』京都大学出版会。
- 太田要（1988）「ドゥーガルド・ステュアートにおける人口と富——古典学派における重農主義」『立教経済学研究』（立教大学）第42巻第2号，10月，119-138頁。
- 只腰親和（2001）「オックスフォード大学における経済学の制度化——問題への導入」『横浜市立大学紀要』（横浜市立大学）第4号，3月，29-47頁。
- （2005）「ウェイトリ経済学における境界区分 demarcation の問題——経済学の初期制度

- 化の視点から」『一橋大学社会科学古典資料センター年報』25号, 3月, 14-29頁。
- (2010)「ウェイトリ経済学と演繹法」(只腰親和・佐々木憲介編『イギリス経済学における方法論の展開——演繹法と帰納法』) 昭和堂。
- 星野彰男 (2010)『アダム・スミスの経済理論』, 関東学院大学出版会。
- (2016)「アダム・スミス理論批判の疑問点」『経済系』(関東学院大学) 第267集, 4月, 16-28頁。
- Ito, S. (2020) *English Economic Thought in the Seventeenth Century: Rejecting the Dutch Model*, Routledge, 2020.
- Malthus, T. R. [1827](1986) Definition in Political Economy, in *The Works of Thomas Robert Malthus*, VIII vols., eds. E. A. Wrigley and D. Souden, vol. VIII, repr. London, Willam Pickering. 玉野井芳郎訳『経済学における諸定義』岩波文庫, 1950年。
- Rashid, S. (1987) "Political Economy As Moral Philosophy: Dugald Stewart of Edinburgh", *Australian Economic Papers*, vol.26-48, pp.145-156.
- Skinner, A. S. (2003) "Economic Theory", in *The Cambridge Companion to the Scottish Enlightenment*, ed., A. Broadie, Cambridge, Cambridge University Press.
- Smith, A. [1776](1976) *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, II vols, eds., R. H. Campbell, A. S. Skinner, W. B. Todd, Oxford, Clarendon Press. 水田洋監訳 杉山忠平訳『国富論』全四冊, 岩波文庫, 2000-2001年。
- Stewart, D. [1800-1810](1994) *Lectures on Political Economy*, in *The Collected Works*, XI vols. (1854-1860), ed., Sir W. Hamilton, vols. VIII-IX, Edinburgh, Thomas Constable / London, A. Hamilton; repr. Bristol, Thoemmes Press.
- Teichgraeber III, R. F. (2000) "Adam Smith and Tradition: The Wealth of Nations Before Malthus", in *Economy, Polity, and Society: British Intellectual History 1750-1950*, eds., S. Collini, R. Whatmore, B. Young, Cambridge, Cambridge University Press.
- Winch, D. (1978) "The System of the North: Dugald Stewart and his Pupils", in *That Noble Science of Politics: A Study in Nineteenth-Century Intellectual History*, eds., S. Collini, D. Winch, J. Burrow, Cambridge, Cambridge University Press. 永井義雄訳「北国の学問体系——デュゴルド・スチュアートと生徒たち——」, 永井義雄・坂本達哉・井上義朗訳『かの高貴なる政治の科学——19世紀知性史研究——』ミネルヴァ書房, 2005年。

『南山経済研究』掲載論文の中で示された内容や意見は、南山大学および南山大学経済学会の公式見解を示すものではありません。また、論文に対するご意見・ご質問や、掲載ファイルに関するお問い合わせは、執筆者までお寄せください。

(荒井 智行, E-mail:araitomo@nanzan-u.ac.jp)